

〈講演〉

本稿は2013年10月21日、愛知大学車道校舎でおこなわれた国際問題研究所の公開講演会（李春利教授司会）での彭新武教授の講演原稿を翻訳したものである。快く寄稿に応じていただいた彭新武教授に謝意を表したい（編集委員会）。

中国式統治 — モデル、弊害と転換 —

彭 新 武

概要：秦漢時代、中国大一統による社会構造の形成と君主体制の確立に伴い、中国社会はこれにより、社会資源に対する全面的な独占を進めたこと、および政治、経済、社会、文化などの一切の社会事業に対する全面的な統制を進めた、「全能型統治」の社会管理モデルを形成した。この後、中国伝統社会の統治モデルは基本的にはこの構造から離れることはなかった。この体制およびこれに関連するイデオロギーは、安定した「大一統」の社会秩序を強硬に維持したと同時に、この体制の段階的な膠着状態と新機軸を生み出すに乏しい作用をもたらし、中国社会を長期的な低水準に留めた「旋回」軌道へと導いていった。これは中国社会を近世西欧先進文明と強烈にぶつかる中で必然的な落伍に向かわせただけでなく、現今の中国社会が体制転換をあらかじめ実現しようとする際の困難性および複雑性を決定づけている。

キーワード：全能統治、官本位（官僚至上主義）、現代的転換

一、全能統治

春秋戦国のころに、宗法は封建制から分離して徐々に瓦解し、秩序を再建せねばならなくなった。このため、諸子百家は「言治せざるなし」（無不言治）となった。先秦諸子は君主たちに数えきれぬほどの見事な要求を提示したが、法家思想がその現実主義的姿勢と「一段於法」の理性的精神をもって、ついには歴史的な青眼を勝ち得ると、秦代には「法を以て教え

とな」すことが、大一統社会構造の形成を促したことによって、中国社会を支配する二千年あまりの君主専制体制を確立した。中国古代の具体的管理モデルからすれば、この中央集権的君主体制の政治体制は、社会資源に対する全面的な独占を進めたこと、および政治、経済、社会、文化などの一切の社会事業に対する全面的な統制を進めた、「全能型統治」の社会管理モデルを形成するに至った。この後、中国社会の治世思想は衰退と変遷の現象を生み出したが、基本的にはこの統治構造から離れることはなかった。

1、中央の必要性

専制体制の根本的特徴は、君主が一切の至上権力を一手に把握し、「口にすれば天の憲法が含まれ」（口銜天憲）、全社会を見渡せば、自ら一姓一家の「莫大な産業」をなし、絶対の支配権を有するということであった。帝王たちは総じて聖人の名を冠し、「聖王」「聖明」と称えられ、その意思是「聖裁」と呼ばれ、その言は「聖旨」となり、いわゆる「一言九鼎」（天下を左右する重みのある一言）となった。聖王は中国文化の「トーテム」（図騰）として、政治生活の中枢をなしただけでなく、全体の社会生活の中枢および支配力となった。これと同時に、伝統的な天命観念が皇帝権力に対する神格化を促すために用いられた。いわゆる「真命天子」、「星宿下凡」、「天子、天に命を受くる」（天子受命于天。）などは、ほぼ後世の儒家が口をそろえて正当化して述べたものであり、つまりは皇帝権力を神秘的ベールで覆ったものであった。こうした体制のもとで、人々が唯一待ち望んだのは「人を治める者」（治人者）が徳を持つことであり、わずかな「善政」が行われることであった。従って、儒家の理想政治は「聖君賢相」の「人治」において必然的な依存へと向かっていった。「人治」の基本的特徴は、君主の権力と意思が法律の上で凌駕することであり、法律は彼の権力に屈するものである。こうした社会ではすでに規則を失い、また法律がなければ、一個人の意思および無常に繰り返す性質により一切を決定するものであった。しかし、現代的意義における「法治」はこれとは相反しており、統治者の全権力はすべて法律のもとに樹立される、法律の生産は人民の意志をあわせて代表されるべきである。それらは民主制と相関するものであり、法律が人の前で平等であることが基本原則である。

しかしながら、礼楽制度の成立は、専制統治が合法のベールに覆われ、臣民を欺いたことで、心から甘んじて、その駆り立てられるに任せたのであった。歴代の統治者は封建等級制度の、特に皇帝の神聖なる地位を維持するために、均しく礼儀作法の修訂を「治国安邦」（国を治める）の大事とした。その結果、礼儀は次第に煩瑣で厳格なものとなり、上に皇帝の宮室車服に至れば、下には臣下の衣冠服飾にみな仔細な規定があり、貴賤尊卑の等級による別を厳格なものとし、度を過ぎたものにしてはならなかった。これは秦の始皇帝、漢の武帝が創設した神聖の名号や繁文縟礼が、帝王を頂点へ推したと同時に、臣民をもおしなべて卑賤の泥沼の中へと向かわせたのであった。漢朝以後、王権が次第に強化されてゆくに従って、皇帝像はゆっくりと隆起する山の峰のように、次第に崇高で、神聖なものとなり、臣民は徐々に卑賤で眇々たるものとなったのである。礼制における朝礼儀式、宴席飲食、喪儀埋葬などはみな君主を中心に設定したものであり、君臣間は儀式の中での距離が拡大してゆき、君主の地位が絶対化していった。

君主の権力と尊厳は、また宗法社会の等級関係によって強化された。本来、戦国の变法運動の中では、血縁を基礎とした伝統政治秩序に強烈な衝突と破壊を与えていたが、しかし、血縁、家長や等級といった宗法の関係における観念は、決してこれにより消滅したわけではなかった。秦漢以来、封建宗法の家族が次第に基層地域的な勢力となり、ひとつの体系となると、「生は互いに親しみ愛し、死は互いに哀れみ痛む」（生相親愛、死相哀痛。）（『白虎通』宗族）ものとして、「一村にはただ両姓のみ、世世婚姻をなし、親疎居るに族あり、少長遊びに群ある」（一村唯两姓、世世為婚姻、親疎居有族、少長游有群。白居易『白氏長慶集』卷十）との結果を生み出した。こうした宗法の家族観念は、その長きに渡る歴史、ひとすじの正統をもって、また飽きもしない説教と統治階級の文字を刻んだことが、中国人の国民心理と性格に極めて影響したと言える。たとえば、それは血縁に対する関係や、祖先に対する礼拝儀式、および伝統に対する極端な尊重といったことを重要視することであった。従って、長期的に血縁集団がひと塊に暮らすことは、国民の家族本位の思想観念を形成したのであり、伝統的中国人にとって代々血を受け継がねばならないことが、至極当然の絶対的義務

とされ、祖先の名を連ねることに対して大義名分からして辞退できないものと見なされたのであった。宗法家族と宗法制度の拡大は全体の社会に到ると、官僚制度と互いに結合し、中国歴史上二千年余りにわたる君主制度の基本モデル——「家国一体」を形成した。「〔皇帝は〕上は天帝の子たり、下は人民の父母たり」（上為皇天子、下為黎庶父母。『漢書』王貢龔鮑伝第四十二〔鮑宣傳〕）とは、こうした観念をよく表している。つまり、小さな地方の吏であっても、農民の「父母官」とは呼び慣わしているのである。統治と被統治の階級関係は、こうした温情的な意思疎通による宗族関係のベールに包まれている。

大一統の社会秩序のなかでは、天子は政治権力の中心であり、地方大権は中央に帰し、中央の権力は君王に集権する。従って、全社会は皇帝を代表する官僚集団を中心に運動作用が進行する。専制体制下でも限定的な分権が存在しているとはいえ、中国歴代王朝は皇帝を権力の中心とする高度な集権的専制制度を長く保持してきた。こうした体制の中では、政府は唯一の利権主体であり、政府と社会が高度に合一化し、全社会の生活が高度に政治化し、いわゆる「王権支配社会」となる。あわせて、これにより「官本位」（官僚至上主義）を主要な表現方法とする社会秩序構造を敷衍して生み出したのであった。その主要な表現とは、以下のとおりである。

第一に、権力の占有は官本位の中心である。等級体系の中では、皇帝は権力の金字塔の頂点にあり、そのもとで中央から地方の各級官吏に到り、官吏の下には数多の全国民衆がいる。こうした権力構造の中では、上は下に対して、命令を下して手足のように指示し、下は上に対して、命令のみに従い、ひたすら馬首を仰ぎ見るのである。権力をめぐっては、可視できない権力の「場」が存在する。「一人得道、鶏犬昇天。」（一人が官僚となると周囲の人間もそのお陰を蒙る）。魯迅先生が言うには、およそ「猛人」とは、「身の回りのほとんどの幾人かの取り巻く人々がいて、水漏れすらせぬよう取り囲んでいる」（身邊便總有幾個包圍的人們、圍得水泄不透）。その結果、「その猛人が次第に愚かなものとなれば、操られる方向に近づいてしまう」（是使該猛人逐漸變成昏庸、有近乎傀儡的趨勢）。「中国が古くからの路をひた走ろうとする理由は、こうした取り巻き連中にあるためである」（中国之所以永是走老路、原因即在包圍。魯迅「扣絲雜感」『而已

集』)。権力が次第に大きくなれば、その「包囲」(取り巻き)も厚くなる。役人同士が互いに庇いあう様は、労働する人民の「食物連鎖」を共になってあしらおうとする構造である。

第二に、利益分配は官本位の帰結である。厳格な等級制度のもとでは、「官は九品あり、人は九等ある」(官有九品、人有九等。)とされ、官が貴く民が賤しいものとされた。これら等級の特権制度は特殊な利益誘導を構成しており、一切の待遇は、みな官位の高低の序列によるものであった。級別が高くなるにつれ待遇もよくなった。そして、古代中国の各種職業は貴いものから賤しいものまで、身の高いものから低いものまで、順次、士、農、工、商として仕官することが人々の最良の職業選択となったのであった。孔子曰く、「道を得ようと学んでいれば自ずと俸禄が得られる」(学也禄在其中矣。『論語』衛霊公第十五))なのであった。荀子をはっきりと「貴さでは天子となり、富では天下を領有する」(貴為天子、富有天下。『荀子』卷第二・榮辱篇第四))と述べている。呂不偉も早くにこの道理を導き出しており、「官市」に投資することは、田畑や経商を強くすることよりも、「その利は千万倍」にもなると述べている。書を読み仕官したからにはわずかな投資で巨利を占めるのが事業であり、千軍万馬を得るために奔走する官途の情景と止め処ない争奪を形成するものである。

第三は、上尊下卑の価値志向である。官本位体制の下では、人々は官を貴く、栄えあるものとしたことで、官職の大小をもって人の価値、業績、地位を判断する官本位文化を形成した。社会大衆が官位および官位の高低差を尺度として一個人の価値を評価する以上は、自ずと人々がみな官位を追い求めることを人生の最も重要な理想とし、これにより普遍的な社会意識が生まれたのである。権力への崇拜、地位への追及、官員への敬畏は、官および官位の昇進を人生最大の価値として追求したのである。そして仕官または出仕した後であろうとなかろうと、官位が高位となろうがなかろうと、個人の成功・成就の重要な価値基準となったのである。「十年の寒窓に訪ねる人なく、一朝名を成し天下に知らる」(十年寒窓無人問、一朝成名天下知。)、「朝に田舎ものと為り、暮に天子堂へ登る」(朝為田舎郎、暮登天子堂。高明『琵琶記』)とする、この聞きなれた説明による口上は、実際に官本位文化の真実が照らし出されている。

2、利出一孔

君主専制が現れるに伴い、資源や蓄財の統制・占有の上では、君主が自ずと天下臣民および一切の財産の最高所有者となった。「大いなる天の下、王の土地でないところはない。地の続く極みまでも、王の臣でない者はいない」（溥天之下。莫非王土。率土之濱。莫非王臣。『詩経』小雅・北山）との古訓は、「家天下」を経典として最も概括している。皇帝が最高の土地所有者となると、特に何らかの名義でもって任意に人の家を差し押さえ、任意にいかなる人の生命および財産を剥奪することができるようになった。各級の官僚となった土皇帝も、各種の合法あるいは非合法による手段で社会の財産を、甚だしきは人命すらも強奪できるようになったのである。このため、真の法権的意義からする「私有財産は神聖で侵すべからず」という土地所有制は、中国では決して存在しないのである。これに対して、法家は「国は君主の車である」（国者君之車也。『韓非子』外儲説右上第三十四）、「君主は人民の仰ぎ尊ぶところから生まれるものである」（主者、人之所仰而生也。『管子』卷二十・形勢解第六十四）と直截的に述べている。

これら観念は君主の資源に対する最高独占権を支持している。従って専制制度全体の社会資源、分配権を統制するために、理論的根拠を提供している。これは現在の社会経済政策上、政府が「強国」を目的としており、利益独占を実現し、統制される民の経済的命脈を全面的に統制し、とりわけ国家が関連する国計民生を経営すること、また暴利的業務を——たとえば糧食、貨幣、塩鉄などを得ようとするものである。こうした政府によって全面的に全体の社会経済の資源と分配構造を独占しようとするのが、いわゆる「利は一孔に出る」（利出一孔）である。管仲が斉を治める際、民間商業に対して打撃と統制を進めようとしたと同時に、また積極的に官営商業を唱導し、官海山政策を実行したこと、すなわち国家の塩鉄専売であるが、後世国家における塩鉄専売制度の源流となり、中国二千年の久しきに亘って影響している。これだけでなく、時代が発展するに伴い、こうした専制政策は不断に拡大し、塩鉄のほか、茶、酒、瓦なども国家が独占する項目となった。こうした政治的手段をもって、国計民生に最も密接な商工業を独占してきた措置に対して、集権的作用を強化したことは、むし

る中国法権社会の長期的停滞へ向かわせたのではなく、自然と経済が統治的地位を占める状況となっていた。

またさらには、統治者の権力が約束されず、民衆に「田があればこれを税とし、身があればこれを役とした」(有田則税之、有身則役之。) ため、従って民衆は「少しでも治績がなければ、奪われない権利があるということにはならなかった」(無尺寸之治柄、無絲毫応有必不可奪之権利。)。歴史上見れば、およそすべての王朝の変法が、その中心的問題として、国と民の間の利益衝突を解決することにある。これは実質、国富と民富に関する問題である。国富と民富はある種矛盾し、相互促進する側面を持ちながらも、相互対立する側面も持つ。このふたつの側面が、もし互いに利を得るならばもとより好いことではあるが、しかし具体的な現実的環境のなかでは、二者間は複雑な碁盤の目に満ちている。「固本」の必要性に基づけば、歴代の一部の開明的統治者は一般的にはみな儒家の「仁政」の道德理想を高揚することが許された。そして、富民に優先的地位を手放させることは、みな戦乱の苦しみを嫌というほど受けた農民に、民力を養わせることを理解させようとしたのであり、「民に利を譲る」(讓利于民) 統治方針を実施した。しかし、各王朝を受け継ぐ君主が日増しに腐敗し奢侈となるに伴い、「民に利を譲る」行いは、常に「民と利を争う」(与民争利) ものに替えられていった。中国歴史上のすべての変法をみれば、実質みな「黄宗羲の定律」から未だ脱しておらず、歴代の賦税改革は、ひとたび改革するごとに、税が加えられ、重くなっていった。

秦から清までの全中国における皇帝権力の時代を見渡すと、国民個人の権利意識は終始、周知する方法がなく、皇帝権力がなんら拘束されることなく、国民の身の自由権と財産権の欠乏が効果的に保たれていった。従って、中国皇帝権の専制社会は終始、官僚集団の金策活動を有効に制限する方法がなかった。金策活動が流行したことで、官僚集団が悪性的に膨張し、国家支出が絶えず増加し、税負担も重くなり、最終的には農民を餓死させる死の淵へと向かわせたのである。各種の合法あるいは非合法の賦役が農民に生存してゆく方法を失わせたとき、農民は生産を放棄し、強盗となることを選び、暴力的な方法で「剥奪者」となり、さらに国家の全面的崩壊を招くのである。王朝が代替わりした後は、新たな王朝が依然として同様

の法権構造に臨み、皇帝権力がやはり至上のものとして、何ら制約を受けず、こうした循環が輪廻の如くめぐっているのである。

3、思想の一統

全能主義の社会管理モデルが、思想的イデオロギーの領域に映し出されているということは、全社会の「思想一統」を実現しようとしたということである。このイデオロギーの一統構造は政治統一の前提条件となっており、それは墨子の「尚同」説、法家の「以法為教」を例に、先秦諸子の共通認識でもあった。歴史上みれば、秦王朝の専制集権が成立するに伴い、一元文化を喧伝し始めたのもここから始まる。秦の始皇帝が李斯の建議を受け入れて、韓非の思想を基準としたことで、文化専制主義の政策を全面的に推し進め、思想の「大一統」を実現したのであり、「今、皇帝は天下を併せ有し、白黒を弁別して尊いものをひとつに定めた。しかし私に学問をしてそれぞれに与して法の教えを誹りあつてい」（今皇帝并有天下、別黑白而定一尊、私学而相与非法教。『史記』秦始皇本紀第六）たのであった。この官が定めた思想に背くような観点に対しては、みな異端邪道視され、政府当局に排斥・鎮圧され、「史官の蔵書で秦の記録でないものはみな焼き捨てる。博士の官が職に掌るもののほか、天下にあえて儒家の詩や書、百家の言を所蔵しているものがあれば、ことごとく郡守らに差し出させ、すべて焼き捨てる。また、あえて秘密裏に詩や書を語り合うものがあれば、みな一族皆殺しの刑にする」（史官非秦記皆焼之、非博士官所職、天下敢有蔵詩書、百家語者、悉詣守尉雜焼之。有敢偶語詩書者皆棄市。以古非今者族。『史記』秦始皇本紀第六）というのであった。先秦の百家争鳴が光り輝く場面は、こうして基本的に収束したのである。

漢は秦の制度を受け継ぎ、同時にまた「漢易秦政」となしたが、統治政策上は、過酷な秦の制度とはまったく異なり、政治、経済、思想の各分野で比較的緩やかな政策を実施し、人々を長期的に抑圧した心情と束縛的な思想を緩めて解放させた。こうした変化はイデオロギーを反映した上で、ひとつには上位統治者が思想文化の専制程度をある程度軽減し、建言を配慮して開放し、読書人が朝廷政治の論議および社会統治の方案を提案することに耳を傾けたのであった。歴史上、漢の高祖が「善言を納れた際に

(そこではあえて) 問題ごとにしなかった。諫言に従うにも丸いものを転がすように、聴いた言葉をその人の能力に求めず、功を取り上げてその素質を問題にしなかった。……〔これが高祖が〕天下に敵とする者が無かった所以である」(納善若不及、従諫若転圜、聴言不求其能、挙功不考其素。……所以無敵於天下也。『漢書』楊胡朱梅云伝第三十七〔梅福伝〕) とあるとおりである。二つ目には、人々が比較的緩やかで平和な政治、学術の気運のなかで社会問題を討論することができ、思想が以前よりも活発なものとなり、かかわる意識も強くなった。たとえば、討論を好み、批評をやめたことで、その方法はむしろ以前と比べて温和なものとなった。秦代に、ややもすればイデオロギー面において、己に異なる高圧的な政策を荒々しく排斥しようとしたことと比べると、大いに進歩を遂げたのであった。しかしながら、安定的な世論環境を形成し維持するためには、統治を有利に進める言論を人々に指導することで、一定の強化風俗や、長期安定的な立国の根本を必要とした。このため、漢の武帝は董仲舒の策を重用し、儒家を尊崇するものと定めた。こうした、自らが儒家の名教・三綱五常に埋没した人倫社会集団においては、自己の独立した思考の自由を失う結果となり、遂には君主一人のみの意志に従う盲目的なものとなった。ここから、「思想統一」は統治階級の既定的政策となったのである。

挙国一致して、ひとつの思想だけであることが、欧州人が実行したのではなく、中国人が実行したということが、名誉ある価値を得たようである。しかし、世界上の物事にはみな二面性が存在する。ある帝国では、官の定めた思想(官定思想)を認めるのみで、ひとつの思想を用いて一切の社会問題を概括し解決し、一切の挑戦に答えようとした。これらは二つの結果が必然的にもたらされた。ひとつは、これら官定思想が臨機応変に、万事順調なシステムとされ、一切の問題を解決し得た答えの中から、独裁者の手の中で任意に解釈された玩具と成り果てることによって、ある程度統一された思想の権威性と厳粛性を喪失していった。他方、官僚的思想の権威性と厳粛性を維持するため、それをある種硬化した教条、あるいは説教としたことで、現実性と闘争性を失ってしまった。この二つの結果はみな「孔孟の道」の生命力を失わせ、人々の思想を束縛する桎梏となったのである。言い換えれば、儒家思想が正統的地位を確立させて以来、いかなる理論刷

新のモデルも「離教叛道」（道理に背く）のレッテルを貼られることを免れなくなってしまった。従って知識人に精神の独立を保つ可能性を徹底して失わせ、代々の文化人を思想上の「植物人間」にさせたことで、民族が進歩する活力を失ってしまったのである。このため、清末以後の停滞と打撃が、歴史的必然となったのである。

二、体制の弊害

認めざるを得ない点は、封建的割拠の状態から統一した集中的国家となる過程のなかで、君主専制が重大な促進作用を果たしたことである。古代社会の歴史的条件のもとでは、社会の発展は時に応じて国家権力の集中に依存して、国家の統一と各種資源の移動分配に有利となるよう、大規模な社会労働を組織し、社会分業を調整し、社会秩序の安定を維持し、経済発展の反映を促し、民族の統一・融合を促進するよう維持し、外来侵略を有効的に制止するといったことをしなければならなかった。しかし、幾百年を経て、中国社会は「一治一乱の局面を迎えるだけで、いまだに半歩も進まない」（僅成此一治一乱之局、而半歩未進）現実が、人々にこうした体制における弊害を更に追求させたのである。

1、高圧的統治

秦が皇帝を創始して以来、およそどの代の皇帝もみな同一の問題を懸念した——それは、どのようにすれば永遠に他の者に手を染めさせずに皇位を保障できるのかということを考えることであり、中国政治のすべてが憂慮するところであった。そしてこの問題を解決する基本的な方法は、高圧的な政治となることにほかならなかった。韓非子の理論で言えば、人は本性の卑劣な生き物であり、彼らが渴望するのは利益のみであり、恐れるものも暴力があるのみであり、このため人が尊重するに値しないことすら信じあうことができず、天下を統治する方法は「長鞭をふるって天下を治める」（執長鞭以御宇内）であり、その用法や術、勢いで束縛し、操縦しようとした。このため、人々の独立した思想を制御し、自発的な組織化を阻止し、君主権力構造に脅威となる勢力に対して、いかなる可能性も消滅さ

せねばならなかった。秦が始皇帝を継いだ後、漢の武帝はまた百家を排斥し「独尊儒術」をし、思想的専制を推し進めた。隋唐以後の科挙制度は、全社会の知的資源を科挙で得た功名利禄へ集中するよう方向性を示すことで、知識活動の多極的多志向的發展を効果的に防ごうとした。その手法は秦の「焚書坑儒」や漢の「独尊儒術」に比するとことさら優れており、専制統治の需要に符合していたと言える。元朝の皇帝達は里甲と連座制度を強化し、漢人に兵器をはじめ包丁さえも使用することを許さなかった。朱元璋は丞相制を廃止し、小農の本能にまかせるまま、中国社会をひとつの大きな村落へと脱皮させ、農民がどのような衣服を身にまとい、家屋に住み、裏の敷地に何の樹木を植え、庭には幾羽の鶏を放つのかといったことをみな一人で規定した。清代には内閣すらもきれいに取り払われ、天下を一個人の天下とするよう徹底した。歴代王朝の皇帝達によるこうした知識伝達は、中国専制制度を完成した状態へと近づけ、徐々に堅固な専制へと向かわせ、遂には中国社会を「一枚岩」とさせたのであった。

こうした社会の本質的特徴は「超安定」である。人々の智力が確実に制限され、活力も効果的に摘み取られた。それは重い枷を背負った囚徒が極度に麻痺しながら忍耐力には優れるというようなものであった。王安石の変法から、張居正の改革、康有為の維新に至るまで、ほぼすべての改革者の末路にはみな名誉の毀損を伴っている。暴力と専制の前において、中国史上無数にある旗揚げは、流した血が河となる代価によるものであり、決して人民の利益拡張に換わるものではなく、むしろ専制制度を次第に厳格化させるものであった。

このため、アヘン戦争以後、西欧の視察者達がこうした姿を以下のように捉えていた。「この忍耐力は中国で見られる最も悲惨な光景である。金持ちの食べ物は多く食いきれず、奪うのは容易であるのに、近場ではむしろ幾千の人間が無言のまま餓死してゆく。この奇怪な現象については、中国人は既に当たり前になっている」。外国人が奇怪だとするのは、災害時の飢餓に絶望した難民に対してであり、「むしろ団結せずに、地方官にその救助を求める」ところであった。外国人がこれら災害民に繰り返し尋ねたところ、得られた答えには「あえてしないのだ」というものであった。

『狂人日記』には、魯迅が狂人の筆を通じて、「易子而食」（子をかえて

食う) とする、君王が子を取り替えて食らうよう指示するというエピソード(『管子』 卷第十・参患第二十八) が挙げられているが、中国の旧制度にはじめて「吃人」(人を食う) の二字が現れており、全ての旧社会に向けた最も激しい声があげられている。それは『南腔北調集・偶成』などの雑文の中では、周から漢の「大辟」に及ぶだけでなく、男子の「宮刑」、女子には「幽閉」を与え、また清朝の「滅族」、「凌遲」へと及ぶのである。その他にも特に明代を注視すれば、「単に皮を剥ぐ方法には二種ある」(単説剥皮法就有兩種。) と示しており「張献忠式」、あるいは「孫可望式」の方法が存在した。明初では、「忠臣の義士」であったとしても、皇帝の何らかの意旨に背いただけで、自らの皮を剥がされ、釜茹でされ、また妻女もともに「教坊」で里から離れて娘にされ、しかも地方におかれるのではなく、兵「營」の中に投げ込まれ、彼等の生命のもとで「小亀の子」あるいは「淫賤の材」となり、「永遠に身を覆せない」道へ送られるのであった。仮に死ねば、「狗に食わせておけ! 此を飲め! 」と扱われるのであった。魯迅が挙げたこの史実の中で、我々は中国専制主義における虐政の残酷さを想像するに難くない。魯迅の言うところには、「有史以来、中国人は長らく同族あるいは異族に殺戮、奴隷、強奪、刑罰による侮辱(刑辱)され、圧迫されてきたのであり、人類が耐え忍び得た毒苦なのではなく、みな身をもって受けてきたのであり、どれひとつを考えても、人が人として生きるようなものとは呼べないのである」。

2、主奴構造

官本位制のもとでは「権力—依存」型構造が社会生活の各層において大きな存在となる。ほぼすべての人間の縦関係には明確な序列があり、かつ序列によって「権力—依存」モデルの等級関係を構成する。君主専制は主体的意識を社会生活の各分野において、強力に植えつけ、各一個体および隅々に波及させ、国民の屈服、権威へと迎合する卑劣な性質を大いにかたどる。いわゆる「一人は剛たり、万夫は柔たり」(一人為剛、万夫為柔。)である。強力な君主を必要とするだけでなく、天下を比較的秩序立てて整理し、かつ規則を規定せねばならない。それは、どのように服役し、納糧し、叩頭(磕頭)し、聖人を褒め称えるか(頌聖)であり、つまりは「天

下太平」である。封建君主専制制度が創始されてから、二千幾年すべてがみな同様であり、変化がないのである。

梁啓超は、専制体制において人民を奴隸として使役し、盗賊を守りに加えることについて、日が続くうちに、農民が奴隸あるいは盗賊の顔をするようになってしまうと指摘している。魯迅が言うには「中国人が今まで『人』の価値を争ってこなかったのは、せいぜい奴隸であつたにすぎず、現在に到るまでもこのとおりであり、然るに奴隸の時代の下では、むしろその数ははっきりしないのである」。このように、魯迅が歴史上において「一乱一治」と見なしたにすぎないのは、二つの時代の相次ぐ交代にあつた。ひとつ目は「奴隸になろうとしてもなれない時代」（想做奴隸而不得的時代）であり、二つ目には、「適宜奴隸に甘んじることができた時代」（暫時做穩了奴隸的時代。魯迅『灯火漫筆』）である。過去の中国人は今までに家の主となる感覚がなく、その国家が他人の私産であるだけであつた。それは他人の奴隸であつたにすぎず、他人に代わって何かしらのものを大切にする必要が全くなかつたのである。人々は自らの塋垣のうちにある物をただ惜しんでいればよかった。塋垣の外にある物は、同じような人々がむしろ旺盛に破壊する欲に取り付かれていた。このため、路上に灯りをつければ自らの物事を必ず妨げただけでなく、必ず打ち壊され、綺麗な広場は心置きなく汚された。一家が一塊になっているだけであつたが、雷峰塔も倒されねばならなかつた（魯迅『論雷峰塔的倒掉』）。

19世紀イギリスの思想家ジョン・ミルが、専制の圧迫下で虐げられた者は、却って権力に対する貪欲性や暴政への欲望を最も持つようになる」と指摘している。中国政治の舞台では、権力を持つ者が旧権力に恋をし、権力なき者が権力を崇拜する。魯迅が描いたのは、阿Qがもとより半時の皇帝となることはできなかったが、彼が夢にも忘れず、依然として帝王の権勢をもって「手に鋼鞭を持ちお前を打」とうとしたのであり、小Dのように自らわずかな恨みを持って「瘦せこけた」同類とやりあつたのであり、勢力を失った者の、女人と財産をすべて奪い、自らの用に足すというものであつた。歴史が経た後に攪拌され、人類文化の息吹は色あせたものとなり、高貴、仁慈、寛容、尊重といったこれらの美しき字句は次第に稀少なものとなった。代わって猜疑、自分勝手、残忍あるいは卑劣といったものが徐々

に折り重なっていったのである。明朝後期、太監魏忠賢は朝廷の正常でない権力変遷の中で、思いがけずも大明の命運を掌握する人物となり、賭博飲酒のほか何もできない文盲の無頼漢が大明の天下をかき乱すことになった。しかしながら、無数の翰林院進士や公卿大臣が彼の門下となってひれ伏し、彼の姻族となったのである。

専制主義が人の個性を抹殺すると、代わって集団意識が至上のものとなった。無論、いかなる機構もみな往々にして個人あるいは少人数の独裁となり、一存で決定される局面が生じた。上層部で失敗するかどうかにかかわらず、下層部では服従するのみであり、ややもすればただこのために少人数が固執した仕事となったのである。時がたつと、人々はいわゆる「集団意識」の重いベールを背負うのみとなり、個性や個人の創造力を発揮できずに、「集団意識」に対する深刻な依存を生み出し、民衆に政治参与や政治変革を促す勇気を失わせ、「臣民」として、「公民」ではない政治文化の伝統を生み出していった。

マルクスは「専制制度の唯一の原則は人類を軽んずることであり、人をその人とならしめず、従ってこの原則はその他多くの原則と比べるとよい部分であり、それが単にひとつの原則にとどまらないだけでなく、かつまた事実なのである。専制君主は総じて人を下賤とみなす。……そうした君主制の原則が優勢を占め、そのうちの組み込まれたものが少数を占め、そのうちの君主制の原則が絶対的道理（天経地義）にあり、さらにその中で根本的に人が埋没するのである」と述べている。人を扼殺すれば、それによって社会の歩み進む活力をも扼殺するのである。人の制限は、最終的には社会経済の発展を制限し、数千年に及ぶ封建的社会発展の遅滞を招き、騰貴した制度的コストとなってゆく。康有為は「中国が敗れ弱くなった理由を考えてみれば、百弊が折り重なるのはみな体制の尊ぶ隔たりの故である」と指摘している。また徐観復は「中国二千年の専制は、中華民族あらゆる災禍の根源である」と述べている。

3、「不善治」

専制集権制度のもとでは、すべて均しく皇帝に有利な原則となるかどうかである。政治は皇帝や官府の特権であり、国家の一切の大政方針もみな

「君王より出て」、「庶民は議」することはない。嚴復は、中央大官は全国の遠大な計画を考慮できず、地方の大員はまた各々自ら政をなし、加うるにこの体制のもとでは、官府があつてはじめて権管官家の事情があるのみであり、もし彼の業績と関係なく考査すれば、彼は興味関心を示さない。官府が意を望まない間は、人民はまた官家を治める職権もなく、ただ私人のこと専管すればよい。久しくして、「ついに心の習うままとなれば、人は各々私を顧みる」ものとなる。孫中山はかつて専制君主の有り様を「不善治家」の「富家翁（億万長者）」に比して、君主専制統治が富裕な祖国に対して、貧しく落後した苦難の結果を与えてきたことに憤慨して訴えている。彼が言うには「中国の国たるや、広大な土地、豊富な資源、数多の人力を備えているのは、一富豪が広大な田園や、余りある財宝、数多くの子孫を有しているのに異ならない。だが不善治家が、田園を荒廢するに任せ、財宝を壟断的に用い、子孫が日々放蕩し、家を挙げれば飢えや寒さが迫り、朝に夕べを保ちがたい、これ実に中国今日の光景なのである」。

高度に集中した皇帝権力はまた極度に重大な失策を生み出しやすい。君主権力が過度に集中したことにより、凡俗な君王は、政務が多忙を極め、身心は疲弊したため、愚昧で錯誤あるいは思考欠如した方策が頻繁に現れるようになった。最も害あるものは、専制体制が各レベルの官吏の選抜と任用に対して、主として「忠君」の程度や表現に依拠したものであり、その才能の大小を問わなかったことである。彼らは皇帝の眼の色や挙動を見て、皇帝の心理に迎合するだけで昇進することができた。仮に才ある官吏がいたとして、皇帝の何かしらの作法に異なった見方をすれば、「意外なことに」あえて「諫言」することとなり、多くの状況下で冷遇され、ひどければ迫害された。唐の太宗のように、大臣の異なる意見を聞くことができる皇帝は、歴史上個別的なものであり、美談として語り継がれている。このような官吏制度のもとでは、必然的に二つの不全な結果を招く。ひとつは官界の暗黒と腐敗であり、もうひとつは業務効率の低下である。官となったものが考えることは、自らの管轄する事象を良くすることではなく、上司に媚びへつらい、皇帝に迎合すれば、一朝日にも皇帝の寵任を得て、官途勇躍して出世することが望めるのであった。これが封建主義の集権制度であり、官僚主義を必然的に生み出す原因でもあった。

こうしたことだけでなく、中国の皇帝権力社会では、家国は不分であり、かつ公私の境のない渾然一体とした政治体制であり、往々にして腐敗の温床となっている。官僚組織の中では、官員たちはおしなべて彼らが従うべき方法で処理するのではなく、彼らが人類の本能的傾向を備え、自己の権力、権利を増大しようとするものである。ひとたび公共権力を掌握した官僚組織は、社会のなかで独立した利益集団を形成し、彼らは勢い自己の行政権力を不断に高め、自己およびその利益集団の何かしらの特権利益を為さねばならないのである。「官僚個人がひとつの集団に融合し、かつ互いに官僚の機械として整合しあう。これら官僚は利益を保つよう一致し、機械のそれぞれの機能が継続して保持できるようにすることで、社会上の権威を維持するのである」。このことは公共選択理論に揭示される「官僚の自主性」である。官僚組織のこの独立した利益はそれが自身の行政的地位と権力を維持拡張させとするものであり、自由勝手に自ら行うそれは潜在的な能力でもある。そして、民衆の利益と比較し、官僚自身の利益が往々にして優先的に自身に関心を払う問題となるのである。従って公共組織に深刻に現れる、自己中心的で自己奉仕的な、かつ民意を曲解し、公共の需要を無視するといったことなどが、不可避的にもたらされることとなるのである。

三、現代の転換モデル

中国専制主義の歴史は、王朝が交替した歴史でもある。しかし専制主義の統治ロジックは驚くほどの長期性や継続性を保持しており、独特な特色を備えた「東洋専制主義」を形成した。この体制およびイデオロギーは安定した「大一統」社会の秩序を強硬に維持したと同時に、この体制の段階的強化と刷新するに乏しい作用を生み出し、中国社会を長期的低水準に留めた「旋回」軌道へと導いていった。これは中国社会が近世西欧先進文明と強烈にぶつかる中で必然的な落伍に向かわせただけでなく、中国社会が何かしら体制転換を実現しようとする際の困難性および複雑性を決定づけたのである。

1、「治乱相循」と「王道恒常」

中国伝統社会の形態すべてが「大一統」に見られるとしても、この過程のなかでは、総じて「合久しくして必ず分かれ、分久しくして必ず合す」（合久必分、分久必合）に現れている。一般的に、どの王朝の「治世」も最初は数人の皇帝統治による期間が出現しており、ひと段落した時期の比較的安定した状況を迎えた後に、最終的な衰退に向かい、新たな王朝へと取って代わる。類似した事件が一度生じれば、中国人の聞きなれたフレーズとなり、いわゆる「治乱相循」（治乱相循環す）となる。東漢末年に仲長統が政論を著した『昌言』の中で、秦漢の五百年に対する「大難三起」の歴史考察を通じて、彼は「乱——治——乱」として、「毎乱愈甚」（乱ごとに酷くなるばかり）とする歴史的循環法則を総括している。この観点はその後の歴史的発展が実証するところであり、秦漢専制史における変遷の線を確かに描き出しており、中国全体の専制史の過程を十分によく覆いつくしている。

中国の歴史が止まることのない循環に陥っている所以として、その根源には、君主権力が制度上の無限性と君主の実質的能力の有限性の間の矛盾、あるいは権力と能力の「不対称」にある。具体的に言えば、専制体制のもとでは、「天下の事は大小なく、みなお上において決」（天下事無大小、皆決于上）し、「無論大小は、朕（皇帝）の心自らが取り決める」（無論巨細、朕心躬自断制）のである。実行し、行いきるかどうかのその一切は、自ずと超越した政治能力が求められた。しかし、現実の君主は結局人であって神ではなく、無限で複雑な政治世界に対して、彼の知識はすべてに限りがあり、「無知の帳」（無知之幕）を脱することは不可能であった。それは、無限に煩雑な政治事務を処理するために、その精力、能力ともに限りあるものであった。無論君主の多くが卓越した計略と精神力を備えた人物であったとしても、任に堪えうることができない定めであり、まして英明な皇帝であったとしても私心と失策を生むことは避けられないものであった。アリストテレスは「個人に統治されるということは、その政治の中で動物的要素が入り混じるということである」と指摘している。モンテスキューは「専制体制の性質は、個人単独の人間がその人間の意志および繰り返し止め処ない志向によってその国を治めることである」と述べている。

明らかなのは、この君主の能力とその用いられる権力の不対称、不適応な状況が、実際の政治生活の中で、君主が権力を乱用すること、あるいは君主として根本的に権力を運用する方法がないことが現れることであり、つまりは深刻な政治的危機が必然的にもたらされるということである。

中国の歴史が「一治一乱」の周期的循環と歴史的変遷に満ちてきたにもかかわらず、現実からすると、中国古代の政治的発展は王朝の興亡による単調な繰り返しを示してきた。このため人々の心の中では、王朝あるいは王権が入れ替わったとしても、「君道は廢れず」（君道不廢）、「王道は常なり」（王道恒常）なのであった。つまりは、無論その政治秩序の理論形態がいかに変化しても、君主を政治秩序の中核とする秩序モデルは、改変不可能なのであった。

では、中国の君主専制制度が長期的に継続し得た原因として、いかなる根源が存在するのであろうか。

第一に、社会における経済生活の単調な繰り返しと、循環した世界像の生成である。専制体制およびそのイデオロギーは、小農自然経済に非常に適した側面を持つ。自然経済は純粹に自然発生したものであり、自然条件の支配を受けた経済形式であり、極端な保守性を備える。同時に自然経済は一家一戸を生産単位および消費単位とし、分散的特徴を持ち、個々の分散的孤立的個別的集合となる。自然災害の襲来と外的の侵攻に臨む際には、強大な社会勢力が形成されて自らを保護し発展させる。このため自然経済は専制政治を生みだし、その権力が物神崇拜する天然の土壤でもあった。中国の農業社会は数千年来の歴史的変化の中で、いかなる実質的刷新も生まれなかったため、相応な循環史観が形成されたのである。いわゆる「天不変にして、道また不変なり」（天不変、道亦不変）であった。要するに、歴代王朝は絶えず交替し得たが、君主専制はむしろ永遠不変的なものであった。中国古代も変易思想が少なくなかったが、しかし「天不変にして、道また不変なり」とする思想が中国の歴史観に終始主導的地位を占め続けてきたのである。

第二に、イデオロギーの完全性である。中国の伝統的な治世の道のりは長時間の転変を経て最終的に確立し、理論上は非常に成熟し、完備された形態である。梁啓超が指摘するとおり、「専制政治の進化は、精巧で完全

無欠であり、天下万国を挙げても、未だ我中国の如きは存在しない」。中華文明は長らく周辺世界を率先してきたことで、雄大な大国の誇りと自信を満たしてきた。想像してみれば、仮に外界環境の衝突がなければ、人々はこの体制と観念の中で、ひたすらに因習をなぞり世代を踏襲するのみであった。さらに、「時によって変化する」(通于時変)伝統的政治の思想にも、君主専制の不変的大前提を維持したもとの、異なる社会情勢に適応して自らの調整を行い得ることができた。従って、ある程度は君主権力の濫用と過度の膨張を制御し、長期的維持と育成完備を可能にさせたのであった。

第三に、官僚体制の利益と価値の作動である。専制体制下の官僚政治はある種の特権政治である。特権政治下の政治権力は、運用によって人民の意志を示すものであり、人民の利益を図るものではない。国家あるいは国民の名の下で運用して人民を統制し、人民を奴役とするものであり、権勢者が自己利益を達する目的のものである。これだけでなく、この権力本位体制は、官僚たちの強力な集団化を招き、社会を凌駕し、その職業的驕慢さを助長し、権力崇拜と利権争奪をもたらすのである。こうした体制と文化モデルは、非常に安全で有益な体制による処置であり、人生の価値における最良の着地点であり、全社会すべてが心理的に向かう体制でもある。官僚政治はまさにこうした高度に集権した専制政治に依存し、儒教文化や宗法社会機構、戸籍制度、科举制度といった数多く重なった要素を融合し、全面的に強固にすることができたのである。

2、百年の「憲政の夢」

中国近代以来の歴史と現実が直面する問題は、いかに「一治一乱」の歴史的循環を避けて、「道德政治」や「聖人政治」の伝統的思想構造を突破するかである。

全中国の近代化過程を見渡すと、実質的に、伝統から現代に転変が生じた社会変化モデルの過程である。1840年、アヘン戦争が「天朝大国」の迷夢を打破し、中国人と世界文明の「軌跡」の序幕を開くこととなった。長い眠りから醒めた中国人は、西欧文明の強大な攻勢のもとで、まずは「器物」から不足しているのだと考え、次いで「夷狄の長技を師として、以て夷を制す」(為師夷長技以制夷)とする「中体西用」の自強への主張を打ち出した。

しかしながら、中日甲午戦争(日清戦争)の失敗はこの専制体制の弊害を徹底的に暴露した。この時代形成に直面するなかで、維新派の人士が専制制度を変革する変法運動を開始していった。この運動は頑固派の鎮圧によって失敗に帰したとはいえ、この改良的思潮の影響のもとで、1908年に清王朝が中国史上初めて成分化した憲法となる『欽定憲法大綱』を公布した。

しかしながら、この上から下への改革は最終的に改革の保守や遅延によって、1911年に孫中山が指導した辛亥革命に打倒されるところとなり、このためこの「憲法」は白紙となってしまった。20世紀初頭、孫中山を代表とする革命派の指導した民主革命が改良運動に取って代わって時代の主流となった。彼らは清朝統治の転覆をしきりに主張すると同時に、「国体を変革」し、民主共和を君主専制に取って代えるものとした。彼らはアメリカ独立とフランス革命を模範とし、資産階級の共和国を最高の理想とみなし、これに対して「開放的態度」を採ることを主張した。しかし、辛亥革命の結果は、決して人々が企図した民主共和制度を打ち立てるものではなく、迎えたのは袁世凱の帝政と復辟であった。

そして、憂患に満ちた意識と愛国激情をもつ民主主義者が強く認識したのは、救国は必ず先に人を救い、人を救うには必ず先に啓蒙するということであり、封建の愚昧性を取り除き、中国文化構造の心理的側面を改変するには、古き中華民族の転換をなしとげることということであった。言い換えれば、中国人にもし徹底した思想啓蒙運動がなく、大いなる文化変革もなければ、いかなる政治変革もみな成功を得ることができないのである。まさに中国と外国を比較するなかで、新世代の知識人が中国と西洋の国民性の間にある「奴隸」と「国民」に雲泥の差を見出したのである。奴隸性に顕著に現れるのは、冷淡で、麻痺したものであり、自らの身以外にまったく関心を示さない点である。このため、国民の公德を育成し、国民に社会の主人公として持つべき社会的責任感を備えさせるということが、当面の急務であった。この国民性を改造する思潮は1915年に開始した新文化運動の中で高まっていった。

思想啓蒙活動として、五四新文化運動の根本的意義は、「人の新たな発見」にあった。五四の新文化人からすれば、人の生命が第一義であり、人の自由な発展が最高の価値基準であった。この点を認めるか否かは、「人

の道徳」と「人を食らう道徳」の根本的差異であり、「新文化」と「旧文化」の根本的差異でもある。五四新文化人たちは、無論、政治制度や経済制度、あるいは道徳規範や生活方式、風俗習慣であろうと、みな人の自由と権利の保障を通じて合法性を獲得する必要があった。しかしながら、近代中国が臨んだ深刻な民族的危機は、時代の発展として中国政府に求めるものが、高能率の政府でなければならず、憲政は国家独立を推進するための富強のツールと見なされた。従って「富強を主とし、民主を輔けとする」（富強為主、民主為輔）道を選ぶこととなった。「民主強国」の立場に基づき、嚴復、梁啓超、孫中山などの思想家は国家の自由を個人の自由より優先することを均しく堅持した。これらの政客が内憂外患を集権の履行、および民主を放棄する理由としてその口実を提供し、さらに各種「新式独裁」の誕生のために、煽り立てる役割を果たしたのである。しかし、頻繁な政体変更は国民に過度の制度移植のコストを負担させただけでなく、かつ民主政治の深い挫折感と「権威懐旧症」（権威主義権力を懐かしむ症候群）を生み出し、一部の知識分子が開明専制や強者政治に公然と賛成したのであった。たとえば、梁啓超は『開明専制論』の中で、長期的な専制制度統治の下での民衆は自治の習慣に乏しく、団体の公益を理解できず、最良の選択は開明専制のみである、と指摘している。

1930年代に到り、「開明専制」論はまた「新式独裁論」に変化した。丁文江は、「新式独裁」は以下の条件を備えるべきだと指摘している。それは、独裁する指導者が国家利害を利害として万全のものにし、近代化国家の性質を徹底的に理解し、全国の専門的人材を十分に利用し、目前の国難問題を利用して全国人民をひとつの旗の下に団結させ、工業化や、近代化と統一を実現し、特に全国人民を団結させ、外敵の侵略に抵抗することであった。後に国民党になって抗戦時期に指導者の独裁性が確立すると、この「独裁はさらに救国に有利とすべし」とする世論の後押しを受けたのである。しかし、国民党内戦の失敗は、国民政府が広大な民衆の政権に対する心理的アイデンティティを完全に失い、統治権威の喪失を示したことで、経済、政治、社会の多様な危機に陥るなかで、最終的に失敗した結末へと向かったのである。この後、中国はいわゆる「社会主義革命」を経て、経済から生産手段の所有権を、政治から国家権力を、文化から真理の裁判権を、社

会領域からほぼすべての公民利益を壟断し、スターリンモデルの独裁体制を打ちたて、中国人に全世界文明の発展過程を途絶えさせたのであった。

3、現代改革の謎局

中国は1970年代末期から、改革開放の現代化発展の道を開始し、経済優先の国家発展戦略を確立した。従って「経済建設を中心とする」ことが「一切の政治問題を圧倒する」こととなった。しかしながら、こうした過度に経済発展の重要性を強調して社会その他の領域の発展を軽視したことは、全国上下各レベルの政府に「発展」が労働者の基本となる労働条件と保障を顧みず、目先の利益を手段に採って経済を発展させることとなった。これにより一連の過酷な社会的結果として、(1) 経済成長を重んじて構造と質量変化を軽視したことこそが、社会のその他領域の発展における深刻な停滞を招き、教育科学の衰退や発展の差が拡大するなど、これらのことが経済の進歩的発展を反対に阻害している。(2) 功を焦り利を求めた短期的行動の激化が、環境汚染と資源浪費を生み出し、最終的に社会の長期的進歩に影響している。(3) すべて政府が統制し、資本と権力が結びつくことで、「権力資本主義」あるいは「官僚資本主義」を生み出してきた。そして「一部の人々が先に富む」政策は、事実上権力がある者が全民衆の財産に対して掠奪するはめになり、従って社会の急激な二極分化をもたらした。国際連合の統計資料に示されるように、中国は現在すでにグローバル規模で貧富の二極化が著しい国家となっている。それだけでなく、近年、既得利益集団が広範に上流社会の同盟を結成することで、社会上の様々な資源を迅速に吸収し、「勝者がすべてを得」(贏者通吃)ること、および社会的地位の「グループ世襲」(集体世襲)が開始されており、各分野で資源のない弱者集団は、すでにほぼ機会均等を失った市場競争によって富裕への夢を実現しようとしている。そして、政府が当初掲げた「共に豊かになる」というコンセンサスは、ついには壊れた「中国夢」(チャイニーズドリーム)と成り果てている。

あらゆる問題はみな明確であり、この「制約のない権力」に加えた「権銭結合」はすでに現今中国における一切の「社会的病苦」の最終的根源となっており、中国経済を強めず、崛起し得ない苦境に立たせている。こう

した体制下では、官員がただ上に対しては責任を負うことができても、下に対して責任を負うことができない政治態勢であり、民生や民意の訴求が長期的に保障や解決を得られないことによって、自身のチェック体制だけでなく、さらに民衆の監督も不足している。各種社会矛盾が絶えず累積することで、民衆の不満は高潮しつづけているが、特に官民の対立激化や政府への抗議デモ（群体性事件）の激増は、まさに災害的な統制喪失への方向性をはっきりと示している。これらの状況下では、枝葉末節をつぎはぎするように、重大な挑戦に対応しようにも遠く及ばないのである。真に実施すべきことは根本的体制と統治方法における実質的変革を行うことである。

社会の動揺は避けねばならず、また権力を安全に帰さねばならず、中国の歴史が真に「革命に別れを告げ」、最小の社会的代価をもって最大の社会民主利益を勝ち取るには、超越した政治技術を必要とし、権利と利益の勝負事の中で打撃面を極力抑え、社会の陣痛を和らげなければならない。一般的に言えば、当局主導の「上より下へ」の変革から、権力を掌握することで比較的良い展開になったとしても、往々にして変革には不徹底性がもたらされる。なぜなら、特権集団と民衆の利益分配の調整が困難となり、さらには実権者あるいはその一部の人間の権益の衝突を避けようとするからである。従って、鍵となるキーポイントでの予期した進展は得られがたくなり、改革の原動力も相対的に不足する。単純に「下から上へ」の変革は、基層社会の呼び声や改革への真の希求を映し出すことが可能であるといえども、改革への十分な力量は不足している。仮に権力機関の連携とその意欲に乏しければ成功は得がたいものとなる。明確なのは、変革を順調に行い、予期した成果が得られるには、我々は実際の過程のなかで上下に対する結びつきを進める必要がある。この過程のなかでは、時間をかけて民主的対話を進める必要がある。つまりは、民主的に、集団的意見を基にした上で、はじめて合法的知識を生むのである。そうして、民衆ははじめて無能な変革対象ではなくなり、上層管理者や変革代表者の権威的統制を受けてはじめて、ようやく変革に十分な動力を得られるのである。

世界各国の改革実践が我々に告げているのは、改革を成功させ得るには、人民の支持を勝ち取り、民間の相互作用を最も必要とするということであ

る。しかしながら、長きにわたって、政府は公民の相互作用に不得手であり、制度的上位下達の道を形成し得ていない。このため改革の推進力を有利にし難くしている。一方で、執政者は往々にして基本的な精神の内省と能力の制御が欠乏し、社会低層部の苦難と不満に対して見て見ぬふりをし、社会低層部の抗争が「事件」となる際に、ただ動揺するだけとなっている。また他方では、一般社会の構成員における政治的主体意識の自覚程度は、民主行政を実現する根本的保証あるが、しかし、現代中国社会の自らの組織能力について言えば、社会の比較的低層にある行動主体は、依然として各方面の多くの制限と制約を受けている。とりわけ経済主義の発展ロジックが推進されるに伴い、金銭への強烈な追及が全社会の共有的価値観となり、全社会各層に極端な功利主義が普遍的に蔓延し、このために改革の精神力を深刻に弱体化させている。明確であるのは、こうした情勢のもとで、いかに変革の力量を動員、奮起させ、燃え立たせ、集めるかが、中国社会の未来の発展を決める鍵の在り処となると考えられる。

(野口武訳)